

哲學研究

第八十五號

第八卷
第四册

山鹿素行に於ける古學思想の發達

加藤 仁 平

先年教育研究雜誌に「素行學の發達史論」と題する小篇を掲げた事があるが、其の後訂正増補すべき點を少からず發見したので、今その古學的方面丈を新しく書き改めて見た。舊稿を重複するところのあるのは切に寛恕を請ふところである。

一

第一博學多才唯^〇今弘文院をさし置世上に有之間敷候(配所殘筆、淺野因菟公)

弘文院林羅山の博學多才は衆人の認むるところであるが、明曆三年正月二十三日に易箆してゐるから、因菟公の此の批評も同年即ち素行子三十六歳以前の事と察せられる。漢學、國史、地理、神道、歌學、和學、兵學其他當時の學問の全領域に亘つてゐる極めて範圍の廣い全素行學の中で、最も強く彼自身の獨創の發揮せられたる、彼の特色で

あり本領である思想の體系を余は彼自身の用語に従つて「聖學」と名づける。而してその聖學の主要なる色彩を求めて古學的、士道的、國體論的の三とする。

(二)古學的方面、全素行學に對する根本論であつて、周公孔子への直接の復歸である。素行子自身は全素行學を聖學といひながらも、多くはこの方面をさして特に聖學といつてゐる。人といふ立場から聖人の道を窺ふ場合の人道的な教で一般には古學といはれてゐる。元來古學といふのは宋學に反對して孔子に還る學説をいふので、支那に於ては明末吳蘇原の頃より興り清朝に榮え或は訓詁、校勘、輯佚、音韻等の諸派に別れ、或は東漢古文の學を主とするもの、西漢今文の學を宗とするもの等の派を生じたが、大體の傾向としては鄭玄、馬融等の如き漢唐の學者の説を基礎として如何に經典を解せるかを説明し而も自説を立てず註そのものはかうだといふ客觀的な言語學的、考證學的研究法を用ゐるが、日本に起つた古學は訓詁は大體に於て宋儒よりも漢唐の方を可なりと認めつゝ、而も自説を交ふこと大なるもので、特に素行子のそれは何等後人の註疏に頼らず専ら *exegesis* 周公孔子を唱へたものである。

(三)士道的、武士社會を前提として右の聖學を實行する時に起るべき論理的必然の發展である。所謂山鹿流兵法と密接不離の關係を有するものであるが彼の兵法が

單なる戰術以上に「孔子老子孟子もろく」の先聖先賢皆兵法の上手なり、日本にては聖徳太子なり」とか、四書六經を兵法の書であるといつて「士の法を正し義を養ひ天下を治め國を治むるは皆士の本とする處なり、其名目其言のかはれるを以て兵法にあらずと思ふなり」(註一)とかいふ性質を含んでゐることを看過してはならない。一般には武士道といはれてゐるが素行子自身は士道といふ語を用ゐてゐる。「孔子曰爲國者足食足兵愚謂文武者左右也陰陽也不可偏廢といふのはその出發點の一である。(三)國體論的、狹義の聖學を實現せんとするは支那に非ずして水土を異にせる日本でありそこに生れそこに住する日本人に於てするといふ日本我の自覺を起した場合をいふので、智、仁、勇といふ聖人の達徳を以て日本の國體を論じ當時の尊外卑内説に反對したものである。

註一 山鹿素行先生精神訓一一九頁の隨筆

平面的論理的にのみ偉人の思想を見んとするは多くの危険を伴ふ。生きくしで發展するのが人間であり偉人の特色でもある。素行子四十六歳の著述四書句讀大全第一卷の巻首に掲げられてる讀大學法註二の中にも

某所解據今日自謂穩只恐後來又有不穩某爲人遲鈍而速成故多走作後之同志勿憚更正焉

と見えてゐるが事實彼の思想はよく變遷しよく發達したものである。而して之を嚴密に究めなければ彼の思想の真相は理解されない。一時代の思潮を論ずる時などに當つて一の大思想家の説を一言のもとに捉へ來つて批評し去ることがあるけれどもそれは往々にしてその大思想家のある時代のある著述に現はれたほんの片鱗に過ぎないものであつて、到底全體を推測することの出来ないやうな場合が多い。これが本篇に於て思想の發達の方面に留意した理由である。

註二 山鹿語類の聖學篇にも讀大學法はあるが、この文は載つてゐない。四書句讀大全は大正八年七月發行の素行會出版本に據つた。

論を進めるに際して先づ根本史料の價值を簡單に批評しておく。尙藝文第十三年第十號及び第十二號の拙稿、山鹿素行の遺著及び關係書に就いてをも參照された。素行の外孫津輕耕道軒が、素行の歿後二十四年五ヶ月の後に脱稿した山鹿誌は、有力なる史料ではあるが日記を見てゐないこと、漢譯に伴ふ意識的、無意識の誇張、當時の傳説使用の誤等があるからその儘に信ずる事の出来ない點がある。殊に耕道

軒自筆の原本が発見されてゐないから本文そのものにも批判の餘地は存する。次に最も重要なりと認められてゐた配所殘筆の自筆の原本を利用することは、流布本のそれに比して著しく確實性を増すものではあるが、延寶三年正月十一日即ち素行子五十四歳に初めて認められたものであるから前半生に於ては往々にして記憶の誤を発見する。吾人は本書と彼の日記とを比較する事によつて、所謂一般の偉人の自敘傳なるものの危険性を暗示される心地がする。第三には彼の日記即ち原題家譜といふものであるが、これも慶安二年(二十八歳頃迄は年譜式の簡略な記事しか載せてないから、自筆原本の墨色を見ない余にはそれ以前の記事に對しては輕々しく、毎日忠實に記載した日記の如き確實性を有するものと信ずる譯には行かない。殊に後半は草筆と蠹害との甚しくて頗る讀み難しといひ、それを史料編纂で寫しておいたのを重ねて複寫したものに據つたのであるから、その間誤謬なきを保證し難い。かくて吾人は彼の前半生の思想に對する根本史料の價値を大體左記の順序に決定しておく。

第一、明に自筆であると思はれる三十五歳頃の著述及びその自序に現はれたるもの、
 第二、日記二十八歳以前の記事と雖も五十四歳の殘筆よりは遙に正確である。

第三、配所殘筆

第四、山鹿誌

而して本篇に於て引用する日記は、京都帝國大學國史研究室所藏の寫本にて上述の程度の確實性あるものを用ゐる配所殘筆は自筆原本の寫眞石版本を用ゐる、山鹿誌は素行會發刊のものに據り、三十五歳頃の著述は凡て自筆の原本に據つた。

二

配所殘筆に所謂六歳より親申付候而學被爲仕候へ共不器用に候而漸八歳の比迄に四書五經七書詩文之書大方よみ覺候とあるのが、凡ゆる史料中で發見し得る學習の最初であつたと思はれる。山鹿誌二頁に九歳而諳四書六經及七書諸家之詩篇文集矣とあるのは、右に基いて少しく事實を誤つたものである。かくて九歳の時林門に入つたが、それが入學の初めであつた。日記寛永七年庚午の條に、

九歳依稻葉氏丹後守先容列羅山子林道春之門人此時既讀四書五經及山谷等書羅山子以無點之論語讀其序予至半不得讀之其後東舟子永喜與道春招予令山谷讀之各感其奇

とあるのはそれである。殘筆に「我等に論語の序無點の唐本に而よませ被申候我等
 よみ候へば山谷を取出候而被爲讀候」とあるは、素行自身の記憶の誤である。かくて
 殘筆によれば幼少にて斯くの如く讀むのは誠に奇特の事ではあるが、田舎學問の者
 が教つたものと見えて點が悪いといふので、十一歳迄に以前に讀んだ書物の點を改
 めて無點の本で讀み直した。山鹿誌三頁に所謂「日々踐霜到學館戴星歸家、講習討論
 殆究先儒之實趣也乎」とあるのはこの頃をさしてゐる。殘筆によればこの年既に二
 百石を以て召抱へんとした大名が現はれてゐる。吾人は茲に先づ彼が早熟的天才
 の一端を發見するのである。此頃は宋學の傍、詩文にも力を注いだものと見えて、日
 記の寛永九、十、十二年正月の條などにその一面が偲ばれる。殘筆に「十一歳の春歲旦
 之詩を初而作候而道春へ見せ候へば、一字改被申候而則序文を書幼少之述作別而感
 入之由書狀被副之和韻被仕候」とあるのは、日記の寛永九年の正月をさしてゐる。修
 教要録の自序に「中好記誦詞章」とあるのは正しく此の頃及びその後數年間を指して
 あるものであらう。やがてこの早熟的天才は愈々その光を發揮して、十五六歳にし
 て既に四書諺解數十卷の處女作を出すに至つた。日記には次の如く載せられてゐ
 る。

寛永十四丑丁年冬十月大學中庸諺解初名欸啓集成、罹丁酉災草稿亦亡、唯中庸草少有、

同十五寅戊年冬論語諺解成罹丁酉災殘篇存五冊爲政里仁子罕先進顏淵

同十六卯巳年冬孟子諺解十四卷成罹丁酉災草藁猶存、

是等の殘本は今以て發見されないから(註三)その内容を確實に知る事は出来ないが、朱子直系の相承、道春永喜口授の講義筆記とも見るべきであらうかと想像される。殘筆にも「我等事幼少より壯年迄專程子朱子之學筋を勤依之其比我等述作の書は皆程朱の學筋迄に候」と見えてをる。

註三 伯爵松浦厚著素行子山鹿甚五衛門一七五頁に掲げられたる所謂大學中庸諺解の燒じせる殘本を輕卒に當代のものとして信ずる事の出来ない理由は藝文第十三年第十號の拙稿を参照されたい。

日記寛永十七辰庚年の條に

今年因蒔田氏甫庵請講論語、又因黒田氏源右衛門請講孟子佐久間久七等來會

とあるに對し、殘筆では「十五歳の時初而大學の講釋仕候聽衆大勢有之候」と寛永十三年の事を述べた後に、

十六歳の時、大森信濃守殿(其比は佐久間久七)黒田信濃守殿(其比は源右衛門)御所望に而孟子を講釋仕候、蒔田甫庵老論語御所望、同年講釋、いづれも翌年迄に講終候

とあつて茲にも三ヶ年の差異を發見する。かくて日記正條二酉年乙酉の條に「十一月講春秋左氏傳畢之、荒尾久成平八近年請聽之」とあるが、これは彼が二十四歳の時であつて、其の後は兵學神道歌學等に就いては重大な時期であるけれども、聖學に就いては二十七歳迄殆ど文献の徴すべきものがない。併し程朱の學筋に満足し得なかつたことは後年殘筆にて當時を回想して「然共我等不器用故に候哉程朱の學を仕候而は持敬靜座之工夫に陷候而人品沈黙に罷成候様に覺候」と記してゐるのでもわかる。

三

かくて彼の思想は漸次發展して、殘筆の語を借りれば、朱子學よりは老莊禪の作略は活達自由に候而性心の作用天地一枚の妙用高く明か成様に被存候而何事も本心自性の用所を以て仕候故滯所無之乾坤打破仕候而も萬代不變の一理は惺惺洒落たる所無疑存候といふに至つた。日記慶安元年三月二十七日の條に道士涼心來話とあり、その四月の條には因友生之求述修身受用抄とあるが、この修身受用抄は

孔子老子釋迦三教ともに文字をおぼへ多聞にいたる事をならへと云おしへあらゆる書物に見えず萬卷の書は唯自性明德の本體をしらん其あししろなり

と、卷頭に於て既に孔老釋三教の一致とも見るべき思想を出し自性明徳の本體を知らんとせるもので、當時程朱學に對して動搖のあつた事は明である。而して邪念を起したり疑つたり惑つたりする事を「神道には二見と云ひ佛道には二念と云ひ儒道には邪知と云ふ」と結論して、こゝには神儒佛之教の一致を示して居る。修教要録の自序に、

壯而口嗜謂理好禪樂老莊而殆以三教爲一致以六理爲糟粕不因程朱之註釋聞字訓則爲註解直指本心覺了其間言行爲皆無過不及縱有過不及亦是一事之糟粕耳以爲象山陽明猶不知此地矣

とあるのは當時の思想をさすものであらう。尙當時老莊を好んでゐた事は、殘筆に中比老子莊子を好み玄々虛無の沙汰を本と在候とあるに徴しても、亦山鹿語類序註四壬辰三十一歳の條のすぐ前に「先生間涵志於老莊之書殆究其理とあるによつても大體察し得られる。

註四 國書刊行會本による。

日記の慶安三庚寅年十月十九日には、因招請至丹羽光重左京大夫亭講莊子齊物論と見えてゐるが慶安三年は素行子二十九歳の時で中江藤樹歿して二年木下長嘯子卒し

て一年の後にして、將軍家光の薨去及び由比正雪註五の隱謀發覺し此の二つの事件は經世家としての素行に餘程の打撃を興へたものでもあり、又その記事は彼の日記に少からざる頁を占めてゐる——に先立つ事一年の時である。殘筆に於ては二十五歳の事として次の如くあらはれてゐる。吾人は是によつて多方面なる素行子が、この方面に於ても亦如何に蘊奥を究め且つ如何に時人より重んぜられたかを知る事が出来る。

同年丹羽左京大夫殿兼而我等に兵書御聞候序に莊子の講釋御所望候而折々講尺候荒尾平八郎殿揖斐與左衛門殿など御聞候其時分は我等專老子莊子の學をこのみ候而講讀申候然に武田道安事明壽院に老莊相傳候近代世上に莊子の講讀は無之候拙者讀候事無心之候間一座聞申度由を淺野因効公へ頼被申候旨因効公拙者へ御斷被成候而道安事丹羽左京殿亭に而一座仕候而拙者莊子聞被申候道安殊外拙者を褒美不大方候其段後迄因効公御咄候道安は醫師殊更學問も廣才に無之候(註六)得共明壽院以來不承候由別而褒美被仕候故書付置候事に候

山鹿誌にも同じく二十五歳の時の事として、之を漢譯してゐるが文章簡潔にして論理が遙に明晰である。又、嗚呼先生何人乎哉と叫んで、子儒子佛子道子神數年而各窮

其實趣其進遠其昇高譬猶奔霄追電之峻怒而走騰矣とも當代の勉學を評してゐる。日記と殘筆との間に四歳の差を發見するが、之も記憶の粗漏に原因するものであらう。茲に所謂明壽院はいふ迄もなく藤原惺窩の事で、山鹿誌には北関山人、藤歛夫等の名を用ゐてゐる。淺野因祐公は備後三次、山鹿誌には三好五萬石の城主で淺野幸長の弟、但馬守長晟の庶出、素行子知己の一人にして、殘筆によれば「第一博學多才唯今弘文院をさし置世上に有之間敷候とか兵法の儀無雙の様に被存候如此上は五萬石望候共似合不申候様には我等は不存候とか批評してゐる人である。

註五 一般には由井と書くやうであるが、素行の日記には由比と記してあるからその儘を用ひておく。

六 山鹿誌には譬而好文學名鳴當時とあり、流布本の一たる有朋堂文庫本の殘筆には「廣く有之」となつてゐるが、固より信用するに足らない。

殘筆によれば斯くの如く云々、虛無の沙汰を本としてをつたけれど、今日日用事物の上においては更に合點不參候といふので、之も自分の不器用故と愈々此道を勤めた。或は又日用事物の上の事は甚だ軽いから如何様にしても苦しからずとも考へて見たが、五倫の道に身を置き日用事物の間に應接してゐるとさうもならず。樹下石上の住居をし、閑居獨身になり、世上の功名をすて果てるのは、無欲清淨成事絕言語

妙用自由成所可有之様に覺えるけれども、天下國家四民事物の上に渡つては大なる事は言ふに及ばず細事にても世上の無學なる者程にも合點がいかない。或は仁を體認するときは一日の間に天下の事がすむやうに考へ、或は慈悲を本にすれば過去遠々の功德に成ると迄いつて、實は世間と學問とは別の事になつて了ふ。是では學問の至極とも考へられぬから儒者佛者に右の所を質問し、又大徳有るといはれる人に、右之品を尋ねて人の作略を見聞したけれども世間とは合はず皆事物が別になつてゐる。神道は本朝の道ではあるが、舊記分明ならず、片端ばかり知れて全からず。之に依つて彼の學問は漸次不審の度を深めて行く。

四

祖心禪尼の斡旋によつて將軍家に抱へられようとしてゐる内に、家光の薨去を見たので、翌年淺野内匠頭の懇請を諾して知行一千石宛て行はれた。恰も承應元辰壬年極月二日彼の三十一歳の時であつたが、爾後萬治三子庚年九月三十九歳に至る七ヶ年十ヶ月間は至極優遇されたものと見えて、

拙者儀相應の奉公被申付候様に達而願申候へ共いかゞ被存候哉番並使者一度も

不被申付候、定而拙者不調法者故に而可有之小稽古日を定置我等罷出候時分は馳走被仕候而浪人分に被仕候

と殘筆に記されてゐる。素行子聖學論の發達史に於ても、この七ヶ年十ヶ月は相當に重要な地位を占めてゐる。二十七歳の修身受用抄以來殆ど纏つた著述を出してゐない我が素行子は、三十五歳に於て兵學、武士道、聖學の諸方面に亘つて當代を記念すべき重要な著述を少からず完結してゐる。聖學に就いても日記明曆二申丙年三月の條の最後に「治教要録、修教要録、武教要録成」と見えてゐるが、共に其の序文に大體の思想は窺はれる。

治教要録の序(註七)によれば嘗て論語學而註を讀んで「學者效也」とあるのを以て歎じて曰く「學而無效則不實學」と。こゝに實學を説明して、

窮至事物之理欲其極處無不到也能到其極則表裏精粗全體大用無不明

と言ひ、更に大學中庸の價値の偉大なることを力説してゐる。僅に三百九十一字に過ぎざる門人のこの序文の中に三度迄も實學の語が見えてゐる。又古今論語專鷲干虛談唯舉俗弊而綱領條目殆不備と論じ、治教要録之爲書似因眞丘氏之書而其趣向甚殊也と説いて、勿論後年の如く漢唐宋明の註によらず、直接周公孔子へ復歸すると

いふ迄には進んでゐないが、大體に於て程朱を奉じながらも幽玄な出世間的な老莊を離れ、特に實學的方面へ向つてゐたことは察せられる。殘筆の

我等事幼少より壯年迄專程子朱子之學筋を勤中略中比老子莊子を好み云々の邊や修教要録の自序を讀むと中比既に程朱學を棄てたやうにも思はれるが——中頃及び壯年の意義は、治教要録及び修教要録と殘筆とで數年の差異を發見するが、こゝは二十七歳前後を意味する——實際は儒學の傍老莊に熱中した丈で、その儒學は相變らず程朱の流を汲んでゐたものと察せられる。かくて治教要録の自叙にも、或は「明明德於天下者大學之所極也。聖學之淵源。到于茲至矣盡矣」と説き、或は「古之帝王爲治之要一言而可幾。所謂以脩身爲本是也。爲治之序有次第。節目有先後。急緩所謂脩身齊家治國平天下也」と論じてゐる。蓋し宋儒眞德秀の大學衍義を明儒丘濬が後に追補せるものに本き其言を増減し其説を先後し本朝の俗を考へ更に實學的に述べたもので門人の序文參看この兩人註七は大體に於て朱子學派と見てよい。

註七 宋元學案卷八十一に西山眞氏學案がある。尙兩氏の説は岩重氏儒學大觀七一六頁參看

修教要録十卷を通じて、學問の目的は修身であるが其の目的を達するには三つの要素がある。道源學問、力行即ち是であるといふのである。其の自序註八にいふ。

不得道源則下學而不知上達、其學術泥着形而下者固陋偏倚塞菴不通也、唯言道源而不究致知力行之功、則其學馳高遠而求心期、悟捉虛寂蹈虛空而不致實地、故致知力行道源一有闕則不聖學

と。吾人は素行子前期の著述に於て、未だ曾て發見せざる聖學の語を、治教要録の自序四百四十一字中に二ヶ所發見し、重ねて本書の自序四百八十三字中に於て三度この語に接した(素行子山鹿甚五左衛門二四三——二四四頁引用の全文に二回しか見えないのは明に脱字である)これも聖學論發達史上注意すべき事である。その致知力行を説き學の高遠に馳するを惡むところに隱元に對して其鳴を感じ得なかつた所以を認め得ると思ふ。山鹿誌十一頁には

先生問佛法之之大意、隱元所對之不出人心明悟之外、先生悉豫所知也云々
と見えてゐる。殘筆に

此時分は別而佛法を貴ひ候而諸五山の名知識に逢參學悟道を樂隱元禪師江迄令相看候

とあるのも二十七八歳頃から此頃迄をさすものであらうが、隱元に會つた頃は既に前述の如く實學的傾向を強く帯びてゐる時であつた。禪師との問答は日記萬治元

年十月十六日の條に詳に記されてゐる。即ち彼の三十七歳の事である。

註八 自筆の原本には泥も虚も現今の活字に求め得ぬ畫に作つてあるが今便宜上改めておく。

素行子山鹿甚五左衛門二四五頁に曰ふ。

茲に注意すべきことは素行子が修教要録の序に於て既に素行子一流の聖學を唱導すべく即ち自己の學系と自己の向上と自己の主張とを明に宣言して居らるゝことである。乃ち後の聖教要録が素行子一流の聖學唱導の宣言に非ずして既に十年前に於て其の第一矢は放たれたのであつた。蓋し修教要録十卷は後の聖教要録の廣本とも云ふべく此の本に於て素行子一流の聖學は窺ひ得らるるのである。

と。實學聖學等に就いて、治教修教兩要録の思想を形式上から少しく前述したが、更に素行自ら修教要録の自序に思想の變遷を述べて、最初に修身受用抄前後の思想と思はれるものを説き、次に、

近來竊思學是何修身而已以此體認於身上則父子之間君臣之際始覺知之不致行之不力於茲去意見棄高遠近恩則向之所爲皆放僻邪異而向之所言皆背天惑人之言也故事物交接之則與天地悖戾是道源不明而知行易據也夫明道源之術不在學問則其

知不致欲致其知則力行而見其效其效不得則學問而致知如此則道源遂明而所聖學之始終也故今以修身爲的以道源學問力行爲三要云々

と述べてゐる。漸次發達して來た素行子の學問が此頃になつて餘程の變化を示したものであつて、自分は右の「近來竊思學是何修身而已」以下に述べてゐるのが素行子生涯の根本論となるべき聖學論の眞髓と見てもよいかと思ふ。配所殘筆で「日用事物の上においては更に合點不參候云々」を云つて、切りに落ち着くべき先きを求めてゐる時の聖學の思想と全然同一であつて殘筆の此際は修教要録の當時三十五歳をさすものであらうと思ふ。かくて學問に不審が出來て愈々博く諸書を見、古の學者たちの申し置きたる儀を考へたけれども不審の條々は埒が明かないので、定めて自分の料簡に相違が有る事と考へて、

數年此不審不分明候所寬文の初我等存候は漢唐宋明の學者の書を見候故合點不參候哉直に周公孔子の書を見申候て是を手本に仕候て學問の筋を正し可申存をれより不通註九後世の書物をば不用聖人の書迄を晝夜勘候て初て聖學の道筋分明に得心仕候て聖學ののりを定候

といふに至つたのである。是から推して考へると、三十五歳に於て大體聖學論が概

念的に出来上つたのであるが、其の後數年間(三十五歳より四十歳或は四十歳代)その不審がはれずにあつて、寛文の初(寛文元年は四十歳)にその據り所として周公孔子への復歸を發明したのである。山鹿誌十二、十三頁に三十九歳の事を述べた後にその後の経過を示して

德行彌厚學日新而終知先儒之意義悉宗性心及理而期頓悟之地暫如殊異端而其實趣全同異端大乖戾聖人之道也

といつてゐるのも、亦以て參考とするに足る。要するに當時聖學の概念だけが大體出来上つたので、未だ眞の孔子教へは目醒めてゐなかつた。「第一矢」と認められたのはかの著者の卓見であるが、聖教要録を略本と見てそれに對する廣本としてならば、あく迄山鹿語類中の聖學篇を推すべきであらう。(未完、二、三、二稿)

註九 不通は普通ではない全くといふ位の意。